

消費の時代に「理想」を再構築すること

——ブーアステイン、デューイ、ニーバー——

谷 川 嘉 浩

I はじめに——消費の時代——

消費は、新しさに駆動される。新しさの追求が飽きられると、新しさから距離をとることが新しさとして評価されるほどだ。しばしば指摘されるように、消費社会の成立は、ジャズ・エイジと呼ばれる1920年代アメリカに見ることができ。当時の人びとにとって「ジャズ」の語は、過去とは断絶した『新しい』のイメージ^①だった^②。新しさが他との差異において成立することを思うと、この言葉は、新しい時代の幕開けだけでなく、消費の時代の実情を表現している。様々な技術革新と、急速かつ大規模な経済発展に支えられた、大量生産／大量消費社会が成立するのは、この頃に他ならない。

歴史家のダニエル・ブーアステインは、消費社会を「途方もない期待」の社会だと規定する。私たちはお好みの姿にな

れるし、食事を料理・給仕してもらえ、望めば世界一周もできる。そんな社会において、

私たちはありとあらゆることを期待する。私たちは矛盾したことや不可能なことも期待する。私たちは広々としたコンパクトカーや、経済的だが豪華な車を期待する。(中略) 私たちは、食べても痩せていること、絶えず移住しながらも隣人と一層仲良くすること、「自ら選んだ教会」に通いながらも私たちを導く力を感じること、神を崇拜しながらも「自らが」神になることを期待する^③。

期待は途方もなく強力なので、全てが期待する「私たち」に準拠して編成されていく。

期待がエスカレートする社会を批評すべく、彼は「イメージ」という用語を導入した。自己は、一度手元に置いたイメー

ジが自身の期待に沿わなければ、好適なイメージに行き遣うまで取り替える。超越性を提示するはずの宗教すら、水平的に並べられ、選択の対象となる。イメージに基づいた思考と行動が蔓延する社会で、人は「全能の……錯覚」を抱いてしまう (IM, 44)。しかし、消費社会は社会構造の問題であって個人の意志の問題ではない。それゆえ、消費を駆動するイメージの檻からは逃れられないとしても、イメージを無批判的に甘受する中で、エゴイステイックな全能感を抱かせるような「消費主義」から脱することは、依然として可能である。神学者のラインホルド・ニーバーは説く。「人びとは、自分自身から『遠ざかる』ことが、つまり、自身を遠近法的な (in perspective) 見方で捉え、自身の様々な思い上がりの滑稽で不合理な側面を認識することができ」と (4)。これこそ、消費主義から距離を取るときに求められる見方である。このような、自己が自身を外から眺めるような視点を、ニーバーに倣って「自己超越 (self-transcendence)」と呼ぶことにしよう。

本稿では、自己超越を扱うにあたって「理想」に軸を据える。ブーアステインによると、消費の時代において、理想は機能不全に陥り、イメージに取って代わられた (後述)。本稿では、彼に対抗する形で、デューイ哲学の中に、可能な理想追求のメカニズムと条件を探り、そこには自己超越と言つてよい態度が見出せることを明らかにしていく。まず次節で、ブーアステインの問題設定を理解することから始めよう。

II イメージの時代⑤

ブーアステインによると、「グラフィック革命」(以下 GR と略す) なる技術革新が、消費社会到来の背景にある。GR が可能にしたのは、「精巧なイメージ」を製造・保存・伝達・普及させることである。GR の典型例とされるのが、蓄音機・カメラ・テレビなどのメディア技術である (IM, 13) (6)。しかし、問題は技術的側面だけではない。GR は、民主化・大衆化と連動する一連の大きな変化の一部だからだ。この変化は、文化が「全ての人に開かれるべきなら、全ての人に理解可能で (かつ無害で) あるはずだ」という信念を生んだ (IM, 119)。かつて上流階級に独占されたハイブローな文化は、途方もない期待に合わせ、標準化された形で流通する (7)。これらの相互補完的な要因がアメリカに消費社会をもたらすことになる。 (IM, 121-2)

こうした背景のもと到来した消費社会の駆動原理が、「イメージ」である (IM, 183-97)。大量生産体制の成功により、アメリカは「前例がないほど多くの人が購買力を持つ社会」となると同時に、「市場の拡大・市場獲得競争」が進展した (IM, 198)。それと並行して、GR によって大量のイメージ製造が可能になり、広告・宣伝が急速に発展した。かくして、イメージ形成・普及を通じて、「個人・機関・企業・製品・サービスの巧みに作られた自己プロフィール」をよりよい形で提示する試みが拡大した (IM, 186)。

大量生産の要請から、競合する諸商品はますます精巧に似

通うようになり、各商品の差異は目立たなくなっていく。それゆえ、機能や形態、使用価値とは異なる、判明なイメージを付与することで、僅かばかりの差異 (IM, 65; 232) が生み出され、差別化が図られることになる。(IM, 198-9)

生活が豊かになって生理的な必要を離れ、大量の商品に取り囲まれるようになると、私たちは自分の欲望を見失う。そのとき購買を左右するのは、機能や有用性でなく、商品のイメージの差異という非本質的要素である (IM, 232-3)。以上から、イメージという概念を「差異を伴った表象」だと定式化できよう (cf. IM, 191-6)。「イメージは、比較を導く……」がゆえに、全ては水平的に並列され、イメージにおいて比べられる (IM, 244)。自己はその一覧から、イメージを取り替え続けるのだ。

Ⅲ 理想の機能不全——ブーアスティンとフィッツジェラルド

これで話は済まない。消費によって「自分たちの経験を製造できる」と信じるうち、「しまいには、これら全てを測るための尺度自体も作ることができると信じるようになった」。その事態を、彼は「The Bulletinを買えば、信念が買える！」という広告に象徴させている。イメージの氾濫によって、途方もない期待は最高潮を迎え、私たちの言語使用に「全般的な変化」を引き起こした。(IM, 181)

アイゼンハワー大統領に提出された報告書は、研究と教育の人工的な区別を批判し、「大学は、こうした自身の自然なイメージを、それほど理解・支持していない」と主張する。

企業や政治家は「自己イメージ」を重要視し、それに自身を近づけたり、イメージと実情のズレをひた隠しにしたりする。あらゆる対象は、「理想を追うのに成功／失敗している」と理想の観点から判断されずに、「よく仕立てられた『イメージ』にぴったるかどうかで判断される」。いわば、イメージは、人が自由に取り替えられる「手段」的な参照点である。(IM, 183-4) (8)

それに対して、「理想の言語」では、理想は、人がそれと現状を常に照らし合わせるような「目的」とみなされる。

理想は、私たちが積極的に努力を差し向けるものであって、私たちがすっぱり収まるものではない。(中略)人も社会も、「完璧な形で」慈善・正義・平等・慈悲に従って生きたものはない。だからこそ、それらはまさしく理想なのだ。理想は、完璧な形では信じるのが幾分難しいからこそ、必要とされる。(IM, 197-8)

「理想」は、その抽象性ゆえに、時代や人を問わず堅持され続けるに足る価値があるともみなされる。それゆえ、理想はいくら困難でも人間の都合で容易に取り替えてよいものではない。

このニュアンスを伝えるべく、「理想は星のようなものだ。人は自らの手でそれに触れることが叶わない」という19世紀半ばの名句を引用する (IM, 186)。理想的確な表現を探すのに、約一世紀——大量消費のなかった時代まで——遡らね

ばならなかった。この隔たりは、理想の機能不全を印象づける。かつて対象のあるべき姿を提示していた超越的な「理想」は、その地位を追われたのに対して、現代では、人の都合で取り替え可能なイメージこそが対象のあるべき姿を提示する役割を果たしている。

同様の感覚は、ブーアステインだけでなく、ある時期以降共有されていた。ジャズ・エイジの名付け親であるフィッツジェラルドは、20世紀前半を回顧して「理想主義が燃え上がったのは、新聞がハーディングとオハイオ・ギャングやサッコ・ヴァンゼッティのような話をメロドラマに仕立てあげるときにだけだった」と述べた⁹⁾。「メロドラマ」「仕立てあげる」「だけだった」という皮肉な物言いに注目したい。新しいメディアの台頭により、「イメージの言語」が「理想の言語」を凌駕した社会では、理想らしきものが立ち上がったとしても、それは「疑似理想」(IM, 185) とも言うべき、どこか人工的であり得ない。

かたや理想は、私たちに要求権を持つ。理想は私たちに奉仕したりしない。私たちが理想に奉仕するのだ。理想に向けて努力するとき何か困難が生じれば、私たちに問題があるのであって、理想に問題があるわけではないと私たちは想定する。(IM, 198)

しかし、消費の時代にあつて、全てが純粹に差異の問題に回収される。とすれば、星のように彼方から自己を捉えるよう

な「理想」を抱こうとしても、義憤の名の下に、他者の頭から無思慮に写し取った言葉で噴き上がるのが関の山ではないか。カリカチュアを免れた仕方では、理想を抱けないのだろうか。その問いに取り組む手がかりを与えてくれるのが、ブーアステインが影響を公言する哲学者ジョン・デューイである¹⁰⁾。

IV デューイによる理想の再構築

Public and its Problems & *A Common Faith* (以下「CF」と略す)などで、デューイは、社会変動で変質しつつある思想的資源を再構築している。興味深いことに、CFではブーアステインが破産宣告した「理想」が再構築される。その論述を見ていこう。

1. CFの理想概念——組み立てられる理想的目的

デューイは、初期の著作 *Psychology* (以下 *Psy* と略す)において、想像力が理想を捉えるという議論を提示した(EW2, 171-2)。CFの議論は、その枠組みをほぼ全面的に継承している(LW9, 30) ¹¹⁾。デューイの基本的な理想観が現れている文章がある。具体化された理想である「理想的目的」は、経験の高まりの中で捉えられた「最も大切なもの」を素材にして組み立てられる、という内容である。

理想化する想像力は、経験のクライマックスの瞬間に見出される最も大切なものを捉え、それらを投影する。その善性のための外的な基準や保証は、一切必要ない。そ

れらは、善として所有され、私たちは、それらから自身の理想的目的を組み立てている。

少し後では、「経験した善を思考・欲求・努力の対象へと投影することから目的が帰結する……」とあることから、理想的目的の組み立ては、想像力の「投影」の働きが担っていることがわかる(12)。(LW9,33)

とはいっても、「最も大切なもの」とは、あまりに曖昧な表現ではないだろうか。しかし、デューイによると、価値に関する感覚がそもそも最初は曖昧なのだ。「実現されるべき目的となる新しい価値の感覚は、最初、おぼろげであやふやな形で生じてくる」と。想像力が掴む「最も大切なもの」とは、価値についての漠然たる感覚なのである。同じことが、理想は「萌芽的 (embryonic)」だと表現されることもある。重要なのは、「その価値を思索し、活動において発展させるうちに、価値は、明晰かつ一貫したものに成長する」とあるように、曖昧な感覚が次第に一貫したものに變化していくということだ。要するに、「理想は、既存条件 (existent conditions) に適用される中で変わっていく」のである。(LW9, 34-5)

ここで、疑問が浮かぶ。様々な理想的目的が、経験に基づいて組み立てられるとしても、てんでばらばらな目標が乱立することにならないのだろうか。直接的には、「想像力は、諸々の実践的・感情的態度を統合する能力だ」(LW9, 30)とあるように、想像力が直接的にはそれらを統合するとみなされて

いる。その統合の様子を考えると、彼の「方向」や「力」という表現が手がかりになる。

理想的目的に示された善の方向……。 (LW9, 32)

様々な目的は、私たちを突き動かし、捉えて離さないような、理想的でないし想像的な力において一致している……。(LW9, 30)

その上、多くの目的が、人を突き動かすような理想的な性質を持つともデューイは言っている (LW9, 14)。これらを考え合わせると、想像力によって捉えられた理想は、漠然としていても、自己を導く方向性や力という性質を持つことがわかる。様々な理想的目的から受けとる漠とした感覚は、咀嚼され、試される中で明確化してくる。価値の感覚による導きに従って、想像力は、理想への「忠実さ」と、その実現に向けた「努力」とを統合する。これにより、場面ごとのばらばらな態度でなく、理想への一貫した「一般的態度」が達成される。これがあれば、ある場面で理想の実現に奉仕しながらも別の場面でそれを裏切ることが避けられる。このように、理想の方向付けが自己の様々な態度を統合するのだ。(LW9, 30)

ところで、目標が無秩序に乱立しかねないとの疑問はどうなったのか。実は既に、理想の実現に向かう「一般的態度」(LW9, 17)の指摘によって解決している。一般的態度に対応する形で、何らかの一般の理想が示されているからだ。態度

が統合されるにつれて、今度は目的の方が整序されていくのだ。デューイが連呼する「理想的なもの (the ideal)」(LW9, 34) という表現は、一般的理想に相当すると考えられる⁽³¹⁾。

2. 理想の拘束性——心理学的観点から

さて、理想を語ることが困難な時代に、デューイはなぜそれを語ろうとしたのか。キャリア初期の PSY と CF の比較を補助線に考えよう。

理想と想像力に関して、CF は PSY をほぼ全面的に継承している。しかし、CF の数少ない変更点に、彼の問題意識は表れている。デューイは、想像力と理想の関係に、二つの本で同様の説明をしながらも、レトリックを変えた。PSY では、「想像力は、理想化された要素を単独で掴まえる」と、人間側だけから記述された (EW2, 171)。他方で CF では、「私たちを動かす理想」(LW9, 26)「私たちを動かす目的や理想」(LW9, 33) というように、理想側に立った語法が繰り返される。PSY では、想像力を通じて「自己」が理想を知覚対象としているのに対して、CF では、「理想」が自己に影響を与えたとされる。つまり、主客が転倒しているのだ。

こうした異なる記述によって、同じものが異なる性格を持つものとして提示されている。歴史的に、制度的宗教は、神聖なものと同様の主客を転倒させ、神の側に立って人間について語る。同様に、彼は「理想」の側に立って自己について語り、自己を遠近法的にまなざす視点、つまり、「自己超越」的視点を確保しようとした⁽³⁴⁾。彼は、制度的宗教が培って

きた自己超越という遺産を相続し、宗教者にも非宗教者にも当てはまる仕方、理想の理論を再構築したので。

実際、彼は、信仰の直向きさを思わせる仕方、理想への献身には「従順な調子が含まれる」と述べている (LW9, 13)。これらは、いずれも理想の権威を強調し、自己を相対化する操作である。だが、こうした議論は、宗教の伝統的な発想に支えられた概念上の操作に過ぎないのではないか。

CF が PSY に依拠していることから示唆される通り、理想への献身が自己超越をもたらすとの主張は、当時の心理学的知見に支えられている。デューイは、自己の理想に対する包括的・持続的な献身を「適応 (adjustment)」と呼び、宗教心理学的な知見と結びつけた。

「適応」は、意志の明示的な産物でなく「適応自体が」意志を持つ「かのように作用する」。宗教者は、それを意識的な熟慮や目標を超えたところにある源泉からの流入と考えた点では正しかった——この事実は、適応が一般に超自然的な源泉⁽³⁵⁾に帰せられてきた理由を説明する手がかりになる上に、恐らくは、ウィリアム・ジェームズが適応を無意識的諸要素に関係付けたことを説明する手がかりになる。(LW9, 14)

適応は、熟慮や目標といった自己の意識レベルの問題ではない。むしろ、適応それ自体が意志を持つかのように働く。いわば、自己は、自身を超えた「源泉」としての理想によって、

憑かれたように突き動かされる。理想の実現にやむにやまれず、駆り立てられるのだ。自身の意識的なコントロールを離れて導かれるように感じ入り、実践するという人間の心理に基づいて、デューイは、理想概念を再構築し、自己超越的な視点を提示したのである⁽¹⁶⁾。

以上の議論は、彼が、自己超越的な契機を含む心理現象に基づき、理想が機能不全を起こす消費の時代に、理想という思想的資源を再構築したものと捉えられる⁽¹⁷⁾。しかし、当の理想の位置づけが、さほど明瞭ではない。以下では、それを明確化しよう。

V 理想の由来と展開——ラウシェンブッシュとパース

CF 47、1933 年の Terry Lectures に基づいて 1934 年に出版された。本節では、時代状況を鑑みて、デューイの理想観の由来と思われるものを指摘するとともに、CF 後の展開を見おきたい。具体的には、彼に対する社会福音運動からの影響に注目した後で、パースの影響下で形作られたデューイの探求論を確認する。それにより、理想の位置づけが判明になるだろう。

1. 福音としての理想——ラウシェンブッシュの影響

まず、20 世紀前半に旋風を巻き起こした社会福音運動に注目する。デューイがこれから受けた影響の大きさは度々指摘される⁽¹⁸⁾。ここでは、運動を牽引したウォルター・ラウシェンブッシュを例にしよう。

彼の基本的発想は、貧困などの社会問題の改善にコミットすること、「神の国」の実現を近づけることだった。彼によると「神の国は常に現在であり将来でもある」上に、「神の国は常に到来しつつあるが、『見よここに』と言うことは決してできない」。「神の国」は、単純に歴史の一時点で到来するものでなく、暫定的に実現されるが、最終的な到来は絶えず繰り延べされるものと理解されていた。それゆえ、社会改善への参画は積極的に奨励される⁽¹⁹⁾。実践的・思想的に近い立場にいたラウシェンブッシュが、理想概念のモデルの一つだった可能性がある。

実際、デューイは、神学を思わせる仕方では理想の権威を表現している。曰く、自己を駆り立て／惹きつけるという「高い理想的質」自体 (LW9, 17) は変わらない。それゆえ「既存条件に適用されるにつれて、理想が変わる」(LW9, 34) うちに、実践・感情的に何らかの変化が訪れたとしても、自己は、変わらず突き動かされ、来るべき「理想的なもの」を目指すのである。

2. Logic における理想の展開——パースの影響

これに類する発想は、元々デューイにあったのだろう。とはいえ、その発想が最も明瞭な形をとるのは、恐らく、CF 以降の展開においてである。CF のための講演や執筆をしていた頃、パースの著作集が刊行されており、デューイはこれを熱心に読んでいた。パースからの明示的な影響は、1938 年に刊行された *Logic: The Theory of Inquiry* (以下 LG と略す)

に見られる (LW12, 530)。以下では、LG に CF 以後の「理想」概念の展開を見ていくのだが、CF の「理想」を考えるにあたり、「探求 (inquiry)」つまり、知識や信念を得るプロセスが主題の LG を参照するというのは、一見奇妙にも思える。実のところ、二書を並べるのには根拠がある。「真・美・善」という一般化された抽象的な諸概念は、探求・創造・行為にとって真正の価値を有する (LW12, 179) として、デューイは、真理と善を「探求」という同じ枠組みで論じている。つまり、LG は、やや道徳的なニュアンスの強かった CF の延長で構想されたものののだ。実際、以下の文章では、真善美が「理想」の一種として同列に扱われる。

それら (「真善美」) は、他のあらゆる真正の理想と同様に、制約的で指向的な力を持つ。それらの真正の機能を發揮するために、実際の状況で満たさねばならないような具体的な条件や作用を思い起こさせるものとして、そうした概念は取り扱われねばならぬ。(LW12, 179)

真は理想の一種なのだから、LG で「真理」について彼が語ることを、「理想」について語ったものと理解できる。LG を CF の発展系とみなすのである²⁰。以下では、簡単にデューイの真理観を追跡しておく。

私たちが信念や知識と呼ぶ安定状態は「保証された言明可能性」と呼ばれる。

疑いにおいて探究が始まり、疑いの必要が取り除かれた状況設定において探究が終わる。後者の事態は、信念や知識という言葉によって示されうるかもしれない。…… (しかし) 私は「保証された主張可能性」という言葉をより好んでいる。(LW12, 15)

保証された主張可能性 (以下 WA と書く) は暫定的なものであり、実験的で継続的な探究において、常に改訂に開かれていることに注意されたい。

しばしば誤解されるのだが、デューイは WA を「真理」と単純に同一視したわけではない²¹。デューイが LG において「論理的な観点からの真理の最良の定義」として言及するのは、パースのそれ——「究極的には全ての探究者によって同意される運命にある意見こそが、私たちが真理と呼ぶものだ」(LW12, 333n6)——である。ここから、諸々の WA に示される方向性に従ってなされた継続的な探究の極限に、来るべきゴールとして「真理」概念を置いたということが読み取れる。

しかし、これは、有限な人間が現実にとどり着きうる地点ではない。むしろ、永遠に繰り延べされる目標である。「より完成された (示唆的な) 言説」としてパースから引用を続け、「不正確さや一面性」の誠実な告白を「不可欠」に含む以上、真理が常に辿り着けないものとして留め置かれることに彼は同意する (LW12, 333n6)。「定義からして、現在のどんな命題の『真理』も、継続的な探究の結果に左右される」からだ (LW14, 56-7)。私たちが手にできるのは、不完全な

もの——改訂に開かれたWA——だけであり、逃げ水のように、真理の到来は繰り延べされる。

真理が理想の一種であることを踏まえて議論を振り返ると、個別の理想が持つ「制約的で指向的な力」(LW12, 179)の極限、つまり、暗示される方向の極限には、「真理」のように、来るべきものであり続ける「理想的なもの」を想定できる。しかし、私たちの手元にある理想は、継続的な探求の結果に左右されるので、常に暫定的である。「理想的なもの」の到来は繰り延べされていく。以上が、LCに見られるパースの影響から導き出されるデューイの理想概念である。

デューイのいう「理想的なもの」は、決して完全には到達できないほど高くから人間を見下ろすものであり、人間の都合で取り替えがきかない。これは、ブーアステインが懐古的に語った「理想」に相当すると言ってよい。しかしながら、デューイは、彼のように理想の機能不全を素朴に嘆くのではなく、理想と自己の間に「理想的目的」という可謬的なレイヤー(LW9, 49)を差し挟むと同時に、理想の超越的な権威を巧みに織り込んで、現代でも機能しうる「理想」を定式化したのである(22)。

本節では、由来と展開の検討により、理想概念の位置づけを明らかにした。とはいえ、理想が、その権威によつて自己を駆り立てるとしても、それによつて途方もない期待を退けられると、なぜ言えるのだろうか。次節では、CWの前提たる彼の心理学を参照することで、その点を明確化する。

VI 共感、敬虔、有限性

デューイは理想が自己に対して持つ拘束力——「自分たちのコントロールを超えた様々な力に私たちが依存していること」(LW9, 17)——を重視していた。デューイの理想概念は、自己超越的な視点を備えるものとして構想されているだけでなく、自己が埋め込まれている条件を強く意識して構想されている。ここに注目しよう。

新しいものを生み出そうとする人は、「自分の前に他者が何をしたか、そして、自分の周囲で何をしているかに依存している」。過去と現在を含む既存条件は、理想生成の要件なので。

想像力は、新しい対象を発展させることになる、既存の事物の再配置という観念に基づいて、「理想を」捉える。(中略) 新しいヴィジョンは、無から生じるのではなく、可能性の見地から、つまり、想像力の見地から……新しい関係で古い事物をまなざすことを通じて生じる。

過去や周囲の物事を無視したところに、達成可能なヴィジョンは出てこないのである。(LW9, 34)

デューイによると、こうした環境への感受性を支えるのは「共感」である。彼はpsyで、ミラーニューロンを連想させる「純粹反射ないし模倣的行為」に触れながら、共感のメカニズムについて書いている。彼は、共感の本性、共感の条件

を以下のように述べている。

要するに、共感とは、他者の経験であるという事実の認識を伴った、他者の経験の再現である。

〔共感による〕そうした投影の条件は、第一に、他者の経験を理解し、引き受けられるのに十分なだけの自分自身の情緒的な経験であり、第二に、本当に他者の経験であると私たちがみなすことができるような、他者への活発な関心である。私たちは、他者の生を自分たちの生に織り込まねばならないだけでなく、私たちの生を他者に織り込まねばならない。

共感是自己の範囲内に他者を導入する能力なのだが、実際に發揮される共感とは、慣れ親しみに応じた偏りが生じてしまう。

(EW2, 285)

〔共感とは、自分の家族の、自分の社会的階級の、自分の隣人の経験に、最初は限定されているかもしれない〕とデューイも認めている。しかし、「これは、共感に欠陥があるからではない」。むしろ、私たちは偏つて共感するよう学習しているのだ。

……私たちの自然の、ある限られた側面と調和するものだけに共感するように学習してきたからである。私たちの自然は拡大し、発展するにつれて、それに応じて増大した共感が存在しなければならない……。

未発展な共感の範囲は限定的だが、彼は、共感の本性に従つて、孤立・断絶に基づく偏りを超えて、発展した共感への志向を促す。「共感とは、常に一層の人間に到達できるよう拡大していく、人間の一層根本的な諸関係を包含できるよう深化していく」可能性がある。(EW2, 286)

ここでは、「友達百人できるかな」というような、共感の量的拡大が思い描かれているのだろうか。ある程度はそうかもしれない。しかし、発展した共感の姿が、この世の全ての人間一人一人を直接の対象として共感を差し向けることだと考えるのは荒唐無稽である上に、彼も別の文章で「質」の問題だと注意を促している (LW7, 257)。それゆえ、上の文章は、共感能力の質的な深まりとして読む必要がある。

この点は、次の文章にも該当する。

……共感の本性からすると、〔自〇の〕個別性 (individuality) の成長には、感覚の普遍性の成長が必然的に伴っている。共感とは、自分の自己を他者と同一視すると同時に、自分の自己と他者を区別する。共感が人間性と同じくらい包括的になると共に、私たちの判明な個別性を深めるまで私たちの生を拡大することによって、私たちは、共感のおかげで、普遍的人格である私たちの真の本性を実現することができるのである。

この文章と先の一節を重ねれば、発展した共感とは、包括性の増大と、個別性の認識の深まりの双方が達成された状態での

あり、そうした共感をいつでも発揮できる状態のことであるとわかる。デューイのいう共感は、つながりを生成する絆であると同時に、それゆえに、各人の差異を際立たせ深める能力なのである。(EW2, 286) (23)

ここで PSY では、人同士の統合に加えて、人と自然の根本的統合が重視されることに注目したい。理想を捉える想像力の「想像力の働きの唯一の基礎は、人と人の、そして、人と人間の根本的な統合である」。それなくしては、想像力のどんな働きも「非現実的で空想的になる」ような、既存条件への感受性である。(EW2, 174)

彼は、CE の指摘を全面化した。「物理的自然や自分の仲間の世界から孤立した人間」という人間理解は根本的に誤っている。むしろ、私たちは「自然的敬虔」を持つべきだ。自然的敬虔とは、「私たちが部分であるところの自然に対する、ある公正な感覚」のことである。いわば、他者と自然への共感を主張している。(LW9, 18)

自然的敬虔のおかげで、「自然的な諸条件にその根を持つ」仕方では理想を捉えることができる (LW9, 33)。

〔理想的〕目的と既存条件の相互作用は、理想的なものを高め、確かめる (improves and tests)。それと同時に、諸条件は改変される。理想は、既存条件に適用されるにつれて変わっていく。そのプロセスは、人類の生と共に、持続・前進する。ある人や集団が成し遂げたことは、その後、後続く人が立つ根拠やスタート地点になる。(LW9, 34)

こうした連続性の強調は、「努力の全能性」や「エゴイズム」(LW9, 18) への批判たりうる。理想の実現の中で何かを新しく生み出すような創造性が発揮されるとしても、やはり、既存条件に基づかざるをえないのだ (LW9, 34)。デューイが、こうして「自然的敬虔」を力説するのは、「有限な人間の能力」(LW9, 28) への意識を促し、理想を通じた自己超越の可能性を開くためだったのだ。

VI おわりに——ニーバーからデューイへ

理想は機能不全に陥ったと嘆くブーアスティンに対して、デューイは、心理学的知見を踏まえ、理想的目的へと駆り立てられる自己像を描き出し、エゴイズムを相対化する「自己超越」の可能性を提示した。以上の議論は、ニーバーの言葉に導かれてなされたものだが、当のニーバーはどんな議論を提示したのだろうか。最後に、デューイ思想の有効性を試すべく、ニーバーの発想と比較したい。

彼は、「良心」の表出を考察するため「自身の活動をまなざす立場にいる自己」、つまり、「自己超越」を論じた。彼の見解は、「より広い視野」以上に「より広い関心」が重要だというものであった⁽²⁴⁾。自己超越によって良心を表明するようない「極めて創造的な人格は、あらゆる社会的ないし歴史的な基準を上回ることに成功しているものの、それに満足しない。社会が設定する以上に厳しい基準を自らに課す能力と傾向を持つからである」(p.22)。この意味で、自己超越者は、社会と自己の双方に批判的視線を向ける。

しかし、彼にとってこうした超越は、「自然の領域」つまり「必然性の領域」に還元されない超自然的なものだ。この視点から、ニーバーはデューイを批判する。「最も典型的な近代の自然主義的哲学者、ジョン・デューイ教授」は、「歴史を必然性の領域に還元し、人間の自由と歴史というドラマのリアリティを曖昧にする」からだ(p.115)。かくして、ニーバーは自然／必然の領域を担う「理性」の限界を指摘する。

……〔無制約な欲望に対する〕制約は、全体として、歴史と生という真逆の力によって与えられる。どんな状況下でも偶然的な要因があまりに膨大なので、純粋に「理性的」な解決は不可能である。(p.23)

こうした発想は、人間が「自然と霊性」の合流地点にあるという彼の人間観に基づく。自然の領域に人間は制約されるだけでなく、人間は「自然・生・自己・理性・世界などの外側に立つ霊性」を備えており、それゆえ、「自己超越の能力」つまり「自己を自身の対象とする能力」を持つ(25)。彼にとって、超自然性が自己超越を可能にしているのだ。

デューイが、自己と社会の双方が変化することを重視し(LW9, 123)、偶然的で不安定なものへの注目を欠かさなかったこと(26)を考えると、ニーバーの注目した翻弄される人間のドラマは、デューイの念頭に置いた状況とどう違うのだろうか。既存条件に配慮しながら、到達した理想的目的には甘んじず、常に繰り延べされる「理想的なもの」を目指すこと

を示唆したデューイは、自己と社会の双方に批判的であることを求める。この点で、両者の目指すところは一致していた。他方で、ニーバーは、自己超越の可能性を説くのに、奇跡や神秘的体験を連想させる「超自然」というミスリーディングな語彙に訴える必要はなかった(cf. LW9, 3)。加えて、理想が機能不全に陥った背景の一つに超自然主義にあるというデューイの考えが正しいとすれば、自己超越と超自然の結合は、むしろ意識的に避けられるべきですらある(LW9, 19)(27)。

デューイは、理想の再構築によって、二重の有限性——手の届かない理想の超越性、そして、それを可能にする他者や自然という自己ではない存在との連続性——を、自身の哲学に導入した。それが、自己を相対化し、全能の錯覚を抑える働きとなることは疑いない。ニーバーの舌鋒鋭いデューイ批判にもかかわらず、この消費の時代に「理想」を再構築することで、デューイは、ニーバーにおいて、ニーバーを超えて、自己超越のための方途を首尾よく提示していたのである。

【註】

(1) 本稿は、アメリカ哲学フォーラム第4回大会(2017年6月23日於東京女子大学)での研究発表「消費社会における超越性」を基にしている。ご意見くださった方々に感謝申し上げる。

(2) 津神久三『「ニューヨーク・ジャズエイジ」』(中央公論社1998) 101頁

(3) Boorstin, D. J., *The Image*, (NY: Vintage Books, 1992), p.4

本書からの引用は (IM, 頁数) で表す。なお、本稿の引用は全て拙訳である。

- (4) Niebuhr, R., *Discerning the Signs of the Times*, (NY: Charles Scribner's Sons, 1946), pp.119-20

- (5) 本節は International Conference on Future of the Past: Tourism and Cultural Heritage in Asia (August 7-8, 2018) の予稿 "Is Daniel Boorstin a Bad Example?: Take The Image Seriously?" を部分的に利用した。

- (6) 集団旅行やモーター車など (IM, 270) のようなテクニクも、GR に数え入れられる点に注意する必要がある。

- (7) これを後押ししたのが、大量生産体制である (IM, 198)。
(8) イメージは "tailor" や "fit into" など衣類を連想させる語彙と共に起る傾向がある。

- (9) Fitzgerald, S., *The Crack-up, with other pieces and stories*, (Hamondsworth: Penguin, 1965), pp.9-10

- (10) 例へば Boorstin, *The Decline of Radicalism*, (NY: Random House, 1969), ch.5

- (11) 拙稿「ロマン主義的遺産の相続者、ジョン・デューイ」『日本デューイ学会紀要』58号(2017)において、想像力の諸機能を詳述するとともに、PSY (初期) の基本的発想が CF (後期) に継承されていることを示した。ただし、PSY で用いられていた、観念連合説的な語彙や、心の内／外という二項対立を連想させる語彙は、CF では放棄された。

- (12) 前掲拙稿「ロマン主義的遺産の相続者、ジョン・デューイ」の語彙で言えば、想像力の「投影」は、知覚された理想(＝媒介的働き)の、異なるカテゴリへの移行(＝改変

的働き)であり、それによる現実と理想の統合(＝統合的働き)であると整理できる。なお、「投影」については、菅野盾樹『恣意性の神話』(勁草書房 1999年)が見通しの良い説明を与えている。

- (13) 伝統的概念とは違う仕方では、「理想的なもの」と「神(God)」を結びつけようと試みている箇所が、この解釈を支持するもう一つの根拠である。(LW9, 29 以下)

- (14) 三宅威仁は、この点に注目した例外的な論者である。「後期デューイの宗教観」基督教研究会編『基督教研究』55号(501頁 1993)。ただし、彼の議論は示唆に留まっており、テキスト上の根拠がない。

- (15) デューイの超自然主義批判は、拙稿「A Common Faith はなぜそう呼ばれるか」関西哲学会編『アルケー』25号 2017を参照。

- (16) 適応は、従順な調子を含むだけでなく、「一層外向的で一層覚悟があり、一層晴れやか」である (LW9, 13)。いわば、適応は、受動的能動性とも言えるものを備えている。

- (17) この遺産相続の簡潔なまとめ。「多くの無神論的な評者とは異なり、デューイは、宗教的衝動の中に価値と高潔さを見た。しかし、価値ある諸々の要素(共同体・敬虔差・理想的なものへの奮起を含む)を救い出すためには、自然的でヒューマニズム的な宗教形態を選び、機能不全に陥った超自然という概念を取り除かねばならぬと感じていた。」McGowan, D., *Voices of Unbelief*, (California: Greenwood, 2012), p.135

- (18) 先駆的な指摘として、以下のもの。Rookefeller, S. C., *John Dewey: Religious Faith and Democratic Humanism*, (NY: Columbia University Press, 1991), p.20, p.157

- (19) Rauschenbusch, W., *A Theology for the Social Gospel*, (NY: Macmillan Co, 1917) pp.140-1, p.227

(20) 結果として、デューイの理想観にはバースの影響が見られる。LGで依拠したバースの著作は、*Collected Papers of Charles Sanders Peirce* のcと5巻(各1933／1934年に発刊)。発行年からすると、CF執筆時に既に影響を受けていた可能性もある。

(21) ラッセルら、デューイの真理観の批判者は、デューイが両者を同一視したと理解する。これに対する要を得た反論として以下のもの。Bacon, M., *Pragmatism*, (Cambridge: Polity, 2012), pp.55-6

(22) 理想の追求における改訂(再記述)については、拙稿『デューイ宗教論における『不安定な覚醒者』『人間存在論』23号2017で論じた。

(23) 日本デューイ学会の講演(2017年9月17日於早稲田大学)で、デイヴィッド・ハンセンは、デューイ哲学の特徴を『近づけば近づくはより一緒になる(closer, closer, together)』ではなく、『近づけば近づくほど離れてしまふ(closer, closer, apart)』と表現した。

(24) Niebuhr, R., *The Self and the Dreams of History*, (NY: Charles Scribner's Sons, 1955), p.13以下、同書からの引用は、頁数を本文に示す。なお、関心の拡大がCFの基底にあることは、前掲の拙稿『A Common Faithはなぜそう呼ばれるか』で示した。

(25) Niebuhr, R., *The Nature and Destiny of Man*, vol.1, (NY: Charles Scribner's Sons, 1943), p.4

(26) Dewey, J., *Experience and Nature*, (NY: Dover, 1958), ch.2

(27) cf. Rorty, R., 1991, *Objectivity, Relativism, and Truth*, (NY: Cambridge University Press, 1991), p.171